

## 災害医療に備える主任者



この人：(独)国立病院機構災害医療センター 福原かおる

この人, こんな所

インタビュー担当：放射線安全取扱部会広報委員会  
小野孝二（東京医療保健大学）

小野：はじめに、所属施設について紹介をしてください。

福原：(独)国立病院機構災害医療センターは、平成16年4月に国立病院から独立行政法人になりました。(独)国立病院機構は全国に143施設あります。6つのブロックに分かれており、その中の関東信越ブロックに属しています。東京都立川市にあり、診療科が26科、455床の病院です。救命救急センターを持ち、また地域医療支援病院、東京都認定がん診療病院の指定を受けています。

災害医療センターは近くに昭和記念公園がある緑豊かな場所に建っています。本稿の写真1は当院の小笠原哲技師長が桜満開のころに撮影しました災害医療センターです。

災害医療センターはその名のとおり国の政策医療を担っています。年に2回、関東大震災が起こった9月と阪神・淡路大震災が起こった1月に病院を挙げての災害訓練を行っています。この訓練は例年ですと、9月は平日の午後を休診にして行い、また1月は土曜日に行っています。

小野：災害訓練の概要について教えてください。

福原：まず、訓練に先立って、説明会が開かれ



写真1

ます。これは全職員が聞けるように同一の内容が複数回行われ、訓練の想定が説明されます。災害想定内容、発災時刻、想定地震規模、病院の被災状況等が説明されます。例えば、近隣で災害は起きたけれど自施設は被災せず傷病者の受け入れを行う、自施設が被災し診療の継続が不能になったので近隣の病院に搬送する等について説明がなされます。これは当院の災害対応マニュアルに、被災状況に応じた災害レベル設定として記載されています。この災害レベル設定に応じた対応がマニュアルに明記されているので、それに則って訓練を行っております。

小野：放射線部ではどのような訓練を実施されているのでしょうか。

福原：その年の病院の被災状況の設定によって異なりますが、放射線部内での負荷を変えた対

応を行っています。例えば、一般撮影室は全て使用不可でポータブル撮影のみ可能、CT撮影室は物品が散乱したが、確認後使用できることが判明したのち稼働する等の設定です。

また、ほぼ毎回行っているのは、屋外での撮影訓練です。平成21年1月、厚生労働省医政局指導課長より発布された医政指発第0107003号「災害時の救護所等におけるエックス線撮影装置の安全な使用について」に基づいて実施しております。

当院では、災害が発生後、すぐに災害対策本部が立ち上がります。そこで、屋外撮影を行うか行わないかの判断がなされます。

小野：具体的に屋外撮影の訓練について教えてください。

福原：まず、テント設営に走ります。テント設営後に管理区域を設定し、ポータブルや必要器材を持ち込みます。必要備品については、すぐに持ち出せるようにまとめてあります。通常診療に使用している器材はリストに記載しており、リストを確認し屋外に持っていきます。何度も訓練を行っているので、備品内容が充実しています。その中でもポイントは蚊取線香です。屋外で距離がとれる所、撮影室のスペースが確保できる場所といえば病院の端、夏は蚊が飛びまわる場所です。あまりにも蚊がひどく、蚊取線香を準備するようにしました。また、冬は吹きさらしの場所なのでとにかく寒いです（写真2）。

訓練の流れは、看護学生が模擬の被災者として来院し、トリアージ後に診察され必要であれば、軽症患者は屋外撮影室に来ます。そこで撮影のポジショニングまで行い、模擬患者の傷病名に合わせて準備した画像を提供します（写真3）。

小野：蚊取線香の必要性はとてもリアルですね。福原さんの日常の業務について教えてください。



写真2



写真3

さい。

福原：普段は超音波検査や一般撮影検査に携わっています。また主任者として、毎月の個人被ばく線量の管理を担当しております。通常よりも線量が高い数値となった放射線業務従事者には業務内容の状況確認と被ばくの低減化の対策を図っています。実際には、聞き取り調査から始めます。まず、始めに線量が高くなった状況について当人に心当たりがあるのか必ず質問します。ある事例を紹介しますと、内視鏡を利用した透視検査の際に、患者が撮影台の上で動い

## 主任者 コーナー

てしまい、検査台から落ちてしまうと大変な医療事故になってしまうため、検査中は長時間にわたり患者を抑えていたので被ばく線量が高くなった事例などがありました。このような場合には、どのように対応すればよかったのか関係者とともに話し合います。そして、防護板などの適切な設置等の設備改善により被ばく低減が図れる場合には、所属長である技師長に相談し、改善対策を施していただくなど被ばく低減に取り組んでおります。

小野：最後に、趣味について紹介してください。

福原：ものすごくありきたりですが、旅行と読書です。最近は釣りを始めました。蛸とワカサギです。両方とも難しかったです。蛸は一杯釣れて、ラッキーという感じでした。海底に触れるか触れないかのところをトントンと動かしていくのですが、針にかかったのか、かからなかったのか、途中で逃げられてしまったのかがよく分からなかったです。釣れた時は、おお、蛸がいたという感じでした。ワカサギ釣りは、まだ2回しか行ったことがないのですが、両方とも悲しい結果でした。釣れたらすぐに食べよう



写真4

と油等々を準備して行きますが、使うまでには至っておりません。初めての時は6人で6匹、2回目は3人で4匹と、その場で揚げて食べるには少なかったので、今度こそ油を使うぞと仲間と意気込んでいます(写真4)。

小野：いい趣味ですね。仲間と楽しいひとときを過ごしていらっしゃる様子が伝わって来ました。本日はお忙しいところありがとうございます。

---

主任者コーナーの編集は、放射線安全取扱部会広報専門委員会が担当しています。

【広報専門委員】

上養義朋(委員長)、池本祐志、小野孝二、川辺 睦、鈴木朗史、桧垣正吾、宮本昌明、吉田浩子